

# [特集]

## クンストカマー：世界の蒐集と エクリチュール

2016年3月28日に「クンストカマー：世界の蒐集とエクリチュール」と題するシンポジウムを新潟大学総合教育研究棟で開催した。

クンストカマー Kunstkammer ・ヴンダーカマー Wunderkammer については徐々に知られつつあるが、クンストカマーは、ルネサンス、バロックの時代にヨーロッパ各地で流行した蒐集キャビネットである。それは、近代科学の影響のもと成立した18世紀末のミュージアムとともに忘れ去られた。従来クンストカマーは（近代科学的）分類の存在しない雑多なコレクションと理解されていたが、1980年頃から学問史における知の変容を解明する研究によってそれが蒐集物の無限の組み合わせを観る者に可能にすることによって宇宙を再現し全体知を目指すコレクションであり、その背後にはマクロコスモスとミクロコスモスの照応関係というピュタゴラスに由来する「前近代的」考え方と、G. プルーノ以後の、宇宙の無限という「近代的」思想が混交していたことが判っている。

主催者である桑原聡（新潟大学）は、ここ6年ほど主に科学研究費補助金の助成を受けながらクンストカマー研究を行ってきた。今回一つの区切りとして関心を持つ研究者に呼びかけ、成果発表を行った。当日の発表は以下の通りである。

「ドイツ・ロマン派の時代における Kunstkammer 概念の受容 — ノヴァーリスとジャン・パウルの場合」（桑原・新潟大学）

「ドイツ近代文学史のトポスとしての「書庫」— E.T.A. ホフマン『黄金の壺』を中心に」（土屋京子・高知大学）

「ドイツ市民階級の室内と蒐集 — ベンヤミンとシュティフター」（明治大学・岡本和子）

「江戸時代の蒐集文化 — 木村兼葭堂と好事家ネットワーク」（学習院大学・伊藤真実子）

「近代皮膚科学における芸術と技術—— 図譜および蠟製標本コレクションの管理と継承」(東京大学・石原あえか)

講演対象は、タイトルにあるとおり、ドイツ文学・文化に現れる「クンストカマー」、「蒐集」、近代医学史における蒐集＝「コレクション」(皮膚学)そして日本近世における蒐集としての木村兼葎堂のコレクションである。日本では西洋の影響を受けた博物館 Museum が導入されるのが明治時代に入ってからである。それまでの蒐集はむしろクンストカマー概念を用いて理解する方が対象に即している。

このシンポジウムで明らかになったのは、クンストカマーの再発見が近代科学知に対する懐疑とその限界の意識、さらにはその打開の試みと軌を一にしているということである。現在ベルリンで進められている「フンボルト・フォーラム」はその実践例である。また文学において蒐集は18世紀末以来文学の近代知に対するアンチテーゼとして隠れたテーマをなしてきたこと、その傾向が1980年代より大きな関心を引きつつあることも注目すべき事実である。トルコの作家オルハン・パムクの『無垢の博物館』2008(ここでの「博物館」はクンストカマー以外の何ものでもない)はまさに蒐集を主題としている。

また普段なかなか論じられることのない医学における蒐集と保存というテーマを扱えたことはクンストカマー・ヴンダーカマー研究にとって大きな成果であった。

今後このテーマがさらに広範囲な関心を呼ぶことを期待したい。

本研究は科学研究費補助金基盤 (C)「ドイツロマン派期の文学と『クンストカマー』受容」(課題番号:24520339)の助成を受けたことをここに記す。

(文責:桑原 聡)

---

◇

## Feature: Kunstkammer – Collecting the World and its Écriture

This feature is the record of a symposium on ‘Collecting the World and its Écriture’ at Niigata University on 28 March 2016. The aim of this symposium was to discuss Kunstkammer and Wunderkammer in the East and West from the end of the 18th century to the present.

The ideal and reality of Kunstkammer has been taking a more growing interest in the field of history of science (Wissenschaftsgeschichte). Kunstkammer were originally Cabinets of Curiosity prevailing in the Renaissance and Baroque times. However, they were gradually forgotten as an increasing number of museums as an enlightened space were established. Since the 1980s, they were rediscovered as a result of reflecting the modern scientific thinking causing specialization of all scientific fields. In order to overcome the radical specialization scholars have been showing more interest in the intention of Kunstkammer to represent the universe with the help of the traditional ancient idea of correspondence between macrocosm and microcosm.

The symposium dealt with the reception of the concept of Kunstkammer by German authors, such as E. T. A. Hofmann, Jean Paul and Walter Benjamin. It also treated Japanese collecting practices in the Edo era represented by Kenkado KIMURA, one of the most eminent collectors in early modern Japan. His collection was nothing but a Kunstkammer. It was our great pleasure to consider the collections of modern medicine especially in dermatology.

Today the concept of Kunstkammer is being realized in the project of “Humboldt-Forum” in Berlin. Many novelists have been paying their attentions to it. Orhan Pamuk can serve as an example of it (“The Museum of Innocence 2008”).

(文責：Satoshi Kuwahara)